第40回

最前線、壁うちやぶるスイマー
河合純一

kawai junichi

生まれたときから目にハンディを負い、中学生で全盲となりながらも、パラリンピック金メダリストと学校教師という2つの夢をかなえた河合純一さんが今回のゲスト。
バルセロナ大会からロンドン大会までの6大会に連続出場し、競泳で金メダル5個を含む21個ものメダルを獲得するという輝かしいパラリンピアン人生と平行して、日本で初めての全盲の教師となり、大学院、教育委員会へ進んで教育の理想を追求。「限界は超えられる」ということを体現してきた河合さんの半生は、映画にもなった。
障害者スポーツの環境づくりにおいても、選手時代から日本パラリンピアンズ協会会長を務める今にいたるまで常に先頭に立ってさまざまな壁をやぶってきた河合さんに、2つの夢の実現までの軌跡、これまで越えてきた壁の数々、そして今後の課題などについて伺った。

聞き手／山本浩　文／髙橋玲美　構成・写真／河合純一、フォート・キシモト

日本水泳連盟の理事として

―― 日本水泳連盟の理事になって初めての夏ですね。

日本障がい者水泳協会が日本水泳連盟に加盟して1年半、日本水泳連盟との人的つながりも深まったかなと思っています。島国ですし、年齢や障害の有無に関わらずあまねく水と親しんで楽しんでもらいたいというのは、日本水泳連盟と日本障がい者水泳協会の共通の願いです。

―― 全国の水泳愛好家が対象になりました。また、重さも違うのではと思いますが？

水の中のスポーツは、障害のあるなしというのが、一番わかりやすいスポーツだと思うんですね。逆に欠落を目の当たりにすることが耐えられないという思いを抱くという人もいるようですけど、僕は、ありのままの姿で自分の力を出し切るということに魅力があるのではないかと思っています。義足をとり、車いすからおり、年齢や性別を超えて、自分に合った泳ぎができるのが水泳の良さですね。

2015年8月　この年から制定された「水泳の日」に水連理事として参加

水に恵まれた環境で成長

―― 静岡は遠州、舞阪のご出身。水に対して大変に整っている環境ですね。

小学校でも中学校でも50mプールがあるのが当たり前という地域で、他の地域のみなさんに驚かれます。古くから舞阪は港町でしたし、水が日常のなかに溶け込んでいました。父とよく行った釣りでは、家で余ったご飯粒を魚のエサにするような。

―― どんな子どもでしたか？

やりたいことには取り組むという姿勢はありました。負けず嫌いだったと思います。

―― 泳ぎ始めたのはいつですか？

5歳くらいのときにスイミングスクールに通い出してからだと思います。小学1年生からは水泳部に入りました。小学校には室内温水プールがあったので、バスに乗ってスクールに行くより楽だったんです。

―― 小学校の水泳部の指導はどのようなものでしたか？

僕の前後の代ではスイミングクラブを抑えて県大会で優勝したりしていたくらいですから、環境や指導ノウハウはかなり整っていたと思います。僕も小学校高学年での目標は地域大会で総合優勝することでした。キャプテンだったので、部としてチーム力を上げようという意識は強かったです。

小学生のころ、水泳部にて（左から4人目）

プールサイドでメダルを下げて

―― 将来強くなって世界で戦おうといった夢は持っていましたか？

それは全然なかったですね。ベストを更新すると先生からあめ玉がもらえて楽しいな、みたいな。ただ、目標というより生活の一部として水泳の占める割合は非常に高かったです。夏なんて朝8時くらいから昼まで、小学生なのに7000mくらい泳いでましたから。それが普通でしたね。

中学1年生のころ、同級生と（右から2人目）

―― 大きな大会の記憶はありますか？

小学6年生のときに、古橋廣之進先生の呼び名にちなんだ「とびうお杯全国少年少女水泳競技大会」第2回大会に出ることができました。

―― 当時の憧れの選手というと、誰になるでしょう？

鈴木大地さんです。1988年のソウルオリンピックが僕の中学1年生のときで、僕も背泳ぎをやっていましたから、印象は強かったです。

―― 中学に入ってからも水泳は生活の中心で、既にがっちり逆三角形の体をされていたのですか？

当時は逆に泳がされ過ぎて、肉もあまりつかなくてガリガリしてました。身長も今とそんなにかわらず、中学3年生のころに167cmくらいで47kgとかでしたね。

15歳で失明 視力のハンデを工夫で克服

―― 目が見えなくなったのはいつですか？

15歳です。それまで、左目はほとんど見えず、右目は0.1くらい見えている状態で、普通に学校生活は送っていました。

―― 目が見えなくなる前後の段階のスイミングというのは、どのような感じだったのでしょうか？

徐々に見えなくなるので、まっすぐ泳げなくなってケガをすることが増えました。背泳ぎだったので、肩をコースロープにこすってしまったり、壁が見えないので頭をぶつけたり。それを克服するためにストロークの数を数えるのを習慣化するようになって、それがすごくよかったなと思います。

―― 目の状態の変化によって、記録などはどうなりましたか？

タイムが伸びないスランプはありましたが、見えなくなったことを伸びない理由にしたことはなかったですね。練習が甘いのか、やり方が悪いのか、工夫が足らないのかという視点で練習していたので。

東京の高校に進学 パラリンピックと出会う

―― 中学卒業後の進路は迷ったりもされたでしょう。

いろいろと考えた末、筑波大学附属盲学校（現：筑波大学附属視覚特別支援学校）に進学することにしました。実は自分は小学生のとき、学校の先生になりたいと思っていたんです。

盲学校にて、化学実験

―― では故郷を離れて東京に。寮生活ですか？

寮生活ですね。

―― 水泳の環境はどうだったのですか？

12mの屋外プールしかなくて、そのプールではほとんど泳ぎませんでした。ただ、偶然にも盲学校進学の前年に水泳を専門とする先生が赴任していて、その先生に指導してもらいながら週に5、6日は都の障害者スポーツセンターなどで練習しました。そして障害者のスポーツ大会に初めて出たときに、翌年にバルセロナパラリンピックがあるから目指したらどうかと言われたんです。

―― それまではパラリンピックというのは頭になかったですか？
なかったですね。当時は飛行機に乗ったこともなければ海外に行ったこともなかったので、クイズで海外旅行が当たったような気分でした。

―― パラリンピック選手ともなれば、練習の中身やスケジュールも変わったのではありませんか？
小中とそれなりの練習量もこなしてきてましたし、抵抗感は全然なかったです。バルセロナパラリンピックには日本から水泳の選手が10人出場したんですが、東京に住んでいる5人で集まって練習したりもしていたので意識も高くやれていたと思います。

―― 一方で教師の夢があるなら、勉強もしなきゃいけませんね。
授業中に一生懸命やることが一番だと思ってましたので、授業時間内でなんとかするという意識でした。

―― 当時、日本国内で河合さんは背泳ぎでも自由形でもトップ3には常に入るようなスイマーでした。俺の敵はいないな、くらいの自信をもっていたわけですか？
障害ごとの違いもありますし、当時は今のようにインターネットも身近ではなかったので世界のレベルもわからず、自分自身が速くなりたいという思いでいました。

―― 障害のカテゴリーはいくつでしたか？
S11です。S13まであって、S11が全盲です。

―― S11は日本国内ですと1レース何人くらいで泳ぐのですか？
多くても3人～5人だと思います。登録数はもっと多かったでしょうけど、地域の大会などではそんな感じだったと思います。

―― レース中、自分がトップかどうかはわかりますか？
泳いでいる間は、ひとつコースを隔てたらほとんど音も聞こえませんから、相手の泳ぎは把握していないですね。

―― ではもうとにかく自分の泳ぎに集中する、自分との戦いがレースのほとんどを占めているということですね。
そうです。基本的には自分の持てる力を出しきるってことが、シンプルですけど一番大切なことだと思ってやっていました。

大舞台で受けたショックがその後の活動の原点に

―― バルセロナに向けて準備として特に行ったことなどはありますか？
当時は代表合宿なんてものもなかったので、夏休み中などは浜松に戻って、弟たちと泳ぎ込みをしました。

1992年
バルセロナパラリンピックで
メダルを獲得（左）

―― 取材とかも来たでしょう。
いやいや、当時はパラリンピックのパの字も記事にならないような時代でしたから。僕がメダルを獲ったときも、2行記事になったくらいでした。パラリンピックなど知られていない時代に出ることができたのは、ある意味貴重な経験でした。

―― 現地での印象はいかがでしたか？
観客数にしても、報道の仕方にしても、日本とヨーロッパはこんなにも違うんだと感じました。中学生時代、試合会場は家族や地域の人でいっぱいになるものだと思っていましたけど、障害者の大会となるとガラガラなんですね。これでも大会なのかな、なんて思いつつ、それが自分のなかでも当たり前になりつつあったのですが、バルセロナに行ったらお客さんがたくさん入っていて、すごく応援されているし、報道もされている。それにショックを受けたのが、今の僕の原点なんだと思うんです。「日本をこういうふうにしたいな」と思いました。

―― バルセロナが自分に残してくれたものは何ですか？
5つのメダルを獲りましたが、金が獲れなかったことが悔しかったので、それを次の目標にできたのが、続ける上で大きなことだったなと今振り返って思います。

—— どんな反省がありましたか？

自分のベストは出したので、まだまだ練習が足りないなと。当時17歳で相手は20代後半、まあその人は世界記録保持者だったりもしたので貫禄負けでもあったんですが、目標が明確になりました。直前のオリンピックで岩崎恭子選手が泳いだプールで自分も大声援を受けながら泳げるという、パラリンピックならではの魅力も感じましたし、だからこそ勝ちたい悔しさがあったというか。もう4年頑張ろうという気持ちにさせてくれました。

大学進学、出会いの先でつかんだアトランタの金

—— バルセロナ後、河合さんの生活はどう変わりましたか？

4年後の大会に向けて一直線というよりは、教師になるという目標のために勉強を一生懸命やりながら水泳もするというのが高校3年生のときの選択肢でしたね。水泳は好きでしたが、飯を食っていけるもんじゃないという認識でした。そして早稲田大学の教育学部に、自己推薦制度を使って入学しました。バルセロナの結果などを評価してもらえたのだと思っています。

1996年
アトランタパラリンピックでの力泳

—— 大学進学を決めた一方で、パラリンピックで金メダルという目標もずっと走らせていたわけですよね。

はい。推薦で入った自分は勉強では落ちこぼれだという意識がありましたので、まず授業にはちゃんと出た上で、水泳を一生懸命やっていました。大学1年生の時にマルタ共和国で開催された障害者の第1回世界選手権（IPC世界選手権）で僕が優勝したのですが、それを大学に報告しに行ったら、報告を聞いてくれた教育学部の学部長が水泳部の部長でもあって、以後僕は所沢の水泳部のプールを使えるようになりました。授業後に行ける日に限られましたが、オリンピックを目指す人たちが隣のプールで追い込んでいるのを肌で感じて刺激を受けました。

1996年
アトランタパラリンピックにて金メダルを獲得し、手を上げて声援に応える

—— その出会いがなければ、河合純一の金メダルはもう少し遅かったかもしれない？

実は出会いがもうひとつあるんです。学部長の縁で朝日新聞から取材がきて、僕の記事が掲載されたのですが、当時オーストラリアに水泳留学されていた早稲田大学卒業生の藤本隆宏（元：オリンピック選手、現：俳優）さんがそれを読んで興味を持ってくれたんですね。その後、アトランタオリンピックをめざす藤本さんと一緒にトレーニングをさせていただいたり、プールを離れた所でもお世話になりました。早稲田で水泳をやった経験で得たつながりは今も大切ですね。障害のあるなしではなく、一生懸命水泳をすることが大切なんだと改めて感じました。

—— いよいよアトランタに行かれます。バルセロナの時と比べてどんな違いがありましたか？

多少、バルセロナに比べれば取材があったかなというくらいで、注目度はそんなに変わりはなかったですね。それよりも、周りの人々にお世話になった感覚が強かったので、恩返しのつもりでメダルを獲るという思いで行ったという気持ちの違いは大きかったです。

―― 4年前は孤独感の中で戦ってらした……。
いや、ただの楽しい海外旅行という感じでしたから。本当に勝負しにいったのはアトランタからだったかもしれないですね。

―― パフォーマンスは納得のいくものでしたか？
金メダルが獲れましたからね。今みたいにプレッシャーをかけられているわけではないので、自分が獲りたかったものを獲っただけだろと言われればそうなんですけど。でも、4年間の目標を果たせた達成感はありました。

―― 92年～96年にかけてのステップは理想的でしたか？
卒業まで1年半の余裕があった高校2年生の時にバルセロナ、大学3年生の時にアトランタと、年齢的に良い巡り合わせだったなと振り返って思います。

―― 金を獲って戻ってきたら、日本国内の反応が違ったのではないですか？
初めて首相官邸に呼ばれて銀杯をいただきました。当時の総理大臣が橋本龍太郎さんだったというのも大きかったかもしれませんね。

故郷・舞阪で中学教師になる

―― そして次は、教師の目標があるわけですね。
はい。教員採用試験に合格して、母校の舞阪中学の教壇に立つことができました。

―― 教師生活の手応えはいかがでしたか？
当時全盲の教師はいなかった時代だから学校側としても大変なことだったと思うんですが、まあ、よかったと思います。「目が見えないのに教師ができるんですか?」という問いにはよく出合いましたが、教師にふさわしい人間が採用試験に合格するわけで、そこに視力は条件なんですか？　という話だと思うんですよね。自分を必要としてくれるのであればという思いでした。

―― 中学校の教師になりたかったのはなぜですか？
高校は学力で分けられていく世界だけど、中学には医者をめざす子もいれば、卒業したらそのまま働くような子もいる。でも社会ってそういう所じゃないですか。世の中には気の合わないやつもいる。でもそういうやつらと一緒にやるべきことがあって、それこそが大切なんだというのを伝えようと思いましてね。

―― 金八先生、舞阪中学版ですか？
そんなのではないですけど（笑）　あとは自分なりに、「自分で決める」ということが一番重要なんだと思っていたんで、中学校の3年間をかけて自分の進路を自分で決めるというのをできるようにしてやりたいなと思いながら、授業や部活動にあたっていましたね。

中学校での授業風景

―― 1年目の教員生活を振り返ってみてどうですか？
静岡県の教育委員会も学校もきちんと準備をしてくれたので、教員生活は非常にいい形でスタートしたなと思っています。

―― 泳ぐ環境はどうでした？
小学校でも中学校でも泳げるし、非常によかったですね。

―― 自分たちの先生が世界でタイトルを獲ったすごい男だというのは、子どもたちも親御さんも知っていたわけですよね。
一応知っていたとは思います。でも金メダルを獲ったら良い先生になれるということではないので。教師の良さは、保護者からすれば「一番子どものことを見てくれるか」であり、教師と子ども、教師と保護者の信頼性につきるんじゃないかと思っていました。

―― でも金メダルは誰でも獲れるわけじゃない。それなりに自分に対して厳しくストイックにやってきたという証にはなりますよね。
それでも、生徒から見たときに、授業がわかり辛かったらそれまでの先生なわけですから。教師としてのスキル、併せてもっともっと人間性を磨かなきゃなと思いながら1年目、2年目とやっていました。

―― 自分の思い描いている教員像に近づいていけるという感覚はあった？
ありましたね。

1教員から、教員育成の新たなステップへ

―― そこから、教員を休職して大学院に進まれます。どのような気持ちの変化がありましたか？
自分自身が、学校で、人に対する気づきとか思いやりを育てる教材になりうるという実感はありました。とはいえ自分の影響力の及ぶ範囲は広く見積もっても校内いっぱいであり、授業で教えるのはその半分。他の先生が活かしてくれてこそ、という面もあります。なかなか自分の思いは伝えにくいなと思った時に、そういうことがわかる教師を増やさないといけないな、と。それで大学院に入ったんです。

―― 自分のような意志や方向性を持った教師を増やすことが必要だと思って選んだステップだったのですね。そして大学院を修了後、現場復帰をされました。新任時代と比べて違った感触はありましたか？
新任時代の5年間は、「俺についてこい」といった力技で子ども達との関係をつくっていた感覚がありましたが、現場に戻ってからの3年間は子どもと適度な距離をもって、より効果的に関われるようになりました。水泳部の練習に関しても、中学で結果を出すことだけでなく、10年20年後に「先生がああ言ったおかげで今楽しく泳げてます」って言ってもらえることも成果なんじゃないかと思えるようになったのが大きいです。その前は、全員のタイムを1秒でも縮めることが自分の使命だ、くらいに思っていましたから。

―― 教員研修などを扱う指導主事にもなられました。
学校外部との関わりや予算の準備など、教育現場にはいろんなことが絡んでいるんだなというのを知りました。特殊教育や養護教育といったくくりから、それぞれの子どもに合った支援をしていこうという特別支援教育の方向性が生まれてきていたころでもあり、新しい情報を入手してどんどん広げていくということをやっていたので、勉強にもなったしやりがいもありました。

長年活躍の秘訣は セルフコーチングと「使命感」

―― 教員、大学院、教員復帰と進んできたわけですが、その間の水泳との両立はどうだったでしょうか？
シドニーではリレーで金メダルを獲りたいという目標があったので、水泳部の練習の合間をぬって、週末に選手仲間を学校のプールに招いて練習したりしていました。ただ、夜8時ごろまで教師としての仕事をしてから泳いで……という生活はシドニーに出場した25歳当時でも負担が大きく、次の大会を目指すならばもっと無理なく両立できる環境をそろえなきゃなと思ったんです。大学院に入ることで、研究と水泳の練習、という風に絞ることができました。

―― シドニーではリレーを含めて金を獲り、水泳の世界ではかなり実績を残したという実感を得たのではありませんか？
それなりに満足感はありました。ただ、スポーツマンの聖地であるアテネには行ってみたい、そこまでがんばろうと思いました。泳ぎ方もそのときそのときに適切なアドバイスをもらいながら取り組んでいたので記録も伸びていました。

―― 長い間、競技生活へ自分をかりたてるものは何だったのでしょうか？
大会出場を重ねるにつれて「パラリンピックを広めるために」という意識に変わっていきました。シドニーで選手団の主将をつとめ、25歳なりに広い視野を意識せざるを得ない状況に追い込まれたことがきっかけだったと思います。

最前線、壁うちやぶるスイマー　河合純一

2000年　シドニーパラリンピックの閉会式にて（後列右から2人目）

―― そして北京、ロンドンと、選手としてのピークを過ぎても出場を続けます。

テレビなどでもパラリンピックが取り上げられる機会は増えていきましたが、相変わらず厚生労働省の管轄下にあるし、競技自体の置かれている状況はあまり変わっていなかった。障害のある人がスポーツをするにあたってどこで困っているか、何が必要かを発信していくためには選手として勝ち続けるしかないなと思ったんです。

―― アスリートでいることによって環境を変えたいと。

はい。北京では、後輩選手たちがメダルを獲れないなかで自分の番で初めてメダルを獲ることができたので、役目を果たすことはできましたね。

―― 北京では中国の活躍がすごく目立ちましたね。

90年代のころは、その国の福祉充実度と金メダルの数が比例していましたが、今は集中的に素質のある選手を育てて勝たせている状況があり、この10年でパラリンピックを評価する軸が変わってきているなと思いますね。

―― ロンドンパラリンピックは、自分にとって集大成といった感覚がありましたか？

はい。メダルは獲れませんでしたが、3種目にエントリーして最後に泳いだ種目で自己ベストが出てるんですよ。この4年間のさまざまなチャレンジも実りましたし、楽しかったですね。

―― 年齢で失われていくものがある一方で、テクニックやコントロールなど、伸びていく要素がある。最後のパラリンピックはどういう武器をもって臨みましたか？

最終的に本番でベストの8～9割を出せれば勝てるように目標値をつくり、メニュー設定をしていました。100%、120%出そうとすると力んでしまいますが、いつも通りのことをやれば8～9割は出る、という安心感で練習ができていたと思いますね。

―― 「ワールドカップ予選の最後の試合で出場が決まるようなスケジュールで勝負をしてはだめだ、1試合前に決めておけ」というサッカーの代表監督の言葉を思い出しました。それができたというのがスイマー河合純一の成熟度なのでしょうね。

本当はコーチがやってくれることなのかもしれませんが、まあコーチがいなかったんで、自分のなかでつくられていったかなとは思いますね。セルフコーチングができていたから長く続けられたと思っています。

―― そして臨む環境も自分で整えてこられた。

たとえば少し前まで、パラリンピックの選手は文部科学省と厚生労働省の管轄違いということで国立スポーツ科学センター（JISS）を使わせてもらえませんでしたが、いろんな交渉をして、さまざまな方々の協力も得てロンドン大会へ向けJISSを使える環境をつくりました。自分が集中してトレーニングする環境をつくるためには誰をどう動かせばいいかなど、プール内だけでなく外側の部分も考えて進む必要がありました。

日本のスポーツ政策の現状、今後の展望

―― 日本のスポーツを取り巻く環境にはここ10年くらいで動きがありましたね。日本のスポーツ政策の変化をパラリンピアンとしてどうご覧になっていましたか？

スポーツ基本法の明文化によって、やっといろいろ動き出したなという印象です。スポーツ基本法でやっと「すべての人」に障害者が含まれることが明記されましたが、それをわざわざ言わざるをえない恥ずかしさみたいなものもありますし、さまざまなジレンマはありましたよね。そんななか、少しでもよりよくしたいなという思いをもって、発言を続けることの重要さを感じています。教育委員会にいたときに、しかるべき場で、ふさわしい立場にいる人が発言して初めて物事が進むんだというのがわかったんですね。

2004年　アテネパラリンピックでの力泳

―― 国政に打って出られたのもそういった動機からですね。

スポーツをどうするか、教育をどうするかというところを訴えました。アクセシビリティ、教育、就労への合理的な配慮、というと堅苦しいですが、障害のある人により日常に溶け込んでもらえるといいなと。僕自身は地域でも早稲田でも学校現場でもそうさせてもらってきたなかで効果を得ていたと思うので。そういう環境や場面を増やすことを目指したいと考えました。

2004年　アテネパラリンピックで金メダルを獲得

2008年 北京パラリンピック

―― 2016年の招致失敗を経て、2020年でようやく東京へのオリンピック・パラリンピック招致が花開きました。この2者の、パラリンピックに対するアプローチの違いをどうみますか？

2016年は、「オリンピック」という言葉の中にパラリンピックも含まれているという考えが基本の概念でしたね。それが途中で「オリンピック・パラリンピック招致委員会」という名称になり、進行形で協力体制がつくられていきました。2020年招致活動では最初からみんなで協力しようと団結できていたのが大きかったのではないかと思います。

―― 2015年4月1日に、文部科学省への移管がありました。障害者スポーツにとってはある種時代の変わり目といえるかと思いますが、一方で物足りないことはありますか？

期待はされている。国も本気になり、予算をつけてくれた。けれども必要なことを実行する人材や組織があまり育っていないのが一番の課題かなという気はしますね。

―― スポーツ推進委員であっても、障害者スポーツ指導の資格を持ってる人が少ない。またその逆もしかりと、なかなか現場での融合も進んでいないようですね。

体育の先生も、資格がないために障害者のスポーツ指導ができないとか。また、障害者スポーツはこれまでリハビリテーションの一貫でしかなかったので、学問の面から捉えられる専門家が育っていない。バイオメカニクスや栄養といったさまざまな立場からも障害者のスポーツに焦点を当てて欲しいですし、大学などで障害者スポーツを学べるような場を設置して欲しい。そうでないと

2012年　ロンドンパラリンピック

2020年東京オリンピック・パラリンピック招致活動

2009年　国際オリンピック委員会（IOC）総会でプレゼンターを務める

パラリンピアンズ協会会長として講演　写真:日本パラリンピアンズ協会

2020年以降、障害者スポーツの発展は続かないと、さまざまな所で発言してますけどね。

―― 2020年以降の課題についてどうお考えですか？

2020年以降にスポーツ行政の予算がしぼられることを前提に、そのマイナスを最小限にするためにこの5年でどう準備するかが問われています。新しい民間機関との融合や、新しい障害者スポーツの形を広めることなど、今まで障害者スポーツ、パラリンピックに関心のなかった人々も巻き込んでいかなければならないと思っています。

―― 現在、日本スポーツ振興センターでの仕事を主とされていますが、ご自分が今後やるべきだと思うことをいくつか挙げていただけますか？

パラリンピックのマルチサポートをしている身としては、まずメダルをどう増やすか。開催国から活躍する選手を生むために何が必要かというと、選手のサポートはもちろん、指導者、競技団体の組織をどうするか、障害のある子どもたちにどうやってチャンスを与えるか。やらなきゃいけないことは山ほどありますね。

―― 2020年以降のレガシーとして期待されていることは？

パラリンピックの開催は日本にとって、障害のあるなしに関わらずみんながスポーツを楽しめる環境を日本がつくれるんだ、ということを証明する大きなチャンスです。同時に、障害のある方が感じている不便さ不自由さには、超高齢化社会への対策に貢献できるヒントが必ずあるはずです。高齢化問題は世界共通の課題でもあり、その解決策を日本が持っているってことが今後の日本の発展性においても重要なんだという視点を持って欲しいなと思います。

―― 2020年以降もっとお忙しくなるんではないかと思いますが、活躍を期待しています。ありがとうございました。

スポーツ歴史の検証
Sport History

河合純一 略歴　世相

1945 第二次世界大戦が終戦
1947 日本国憲法が施行
1950 朝鮮戦争が勃発
1951 安全保障条約を締結
1955 日本の高度経済成長の開始

1964 昭和39
代々木オリンピックプール完成
東京パラリンピック開催

1964 東海道新幹線が開業

1965 昭和40
第1回全国身体障害者スポーツ大会、
岐阜県にて開催される
これが全国的な競技会の始まりとなる

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸
1973 オイルショックが始まる

1974 昭和49
日本で初めて大阪市に身体障害者専用の
スポーツセンターがオープン

1975 河合純一氏、静岡県に生まれる
先天性ブドウ膜欠損症のため
視力は右目のみ

1976 ロッキード事件が表面化

1978 河合純一氏、右目の手術を受け、
0.1の視力を取り戻す
1978 日中平和友好条約を調印

1980 昭和55
アーネムパラリンピック開催
1980 河合純一氏、水泳を始める

1982 東北、上越新幹線が開業

1984 昭和59
日本身体障がい者水泳連盟発足
第1回日本身体障がい者水泳選手権大会開催
ニューヨーク・アイレスベリーパラリンピック開催

1986 河合純一氏、浜名地区西ブロック水泳
大会、50m背泳ぎにて優勝

1988 昭和63
ソウルパラリンピック開催

1990 河合純一氏、中学3年生になり、
右目の視力が完全に失われる
国立筑波大付属盲学校高等部に入学し、
水泳部に入部する

1992 平成4
バルセロナパラリンピック開催
1992 河合純一氏、バルセロナパラリンピックにて
銀メダル2個、銅メダル3個を獲得

1994 河合純一氏、早稲田大学教育学部入学
IPC世界選手権（マルタ共和国）水泳競技
にて金メダル3個、銅メダル1個を獲得

1995 阪神・淡路大震災が発生

1996 平成8
アトランタパラリンピック開催
1996 河合純一氏、アトランタパラリンピックにて
金メダル2個、銀メダル1個、銅メダル1個を獲得

1997 河合純一氏、早稲田大学を卒業し、母校の
舞阪中学校に社会科の教師として着任する
1997 香港が中国に返還される

2000 平成12
シドニーパラリンピック開催
2000 河合純一氏、シドニーパラリンピックにて
金メダル2個、銀メダル3個を獲得

2003 河合純一氏、
自伝映画『夢追いかけて』が劇場公開

2004 平成16
アテネパラリンピック開催
2004 河合純一氏、アテネパラリンピックにて
金メダル1個、銀メダル2個、銅メダル2個を獲得

2005 河合純一氏、IBSA世界ユース選手権大会の
日本水泳チーム監督を務める

2006 河合純一氏、JICA青年海外協力隊として
マレーシアの視覚障害者への水泳指導を行う

2008 平成20
北京パラリンピック開催
2008 河合純一氏、北京パラリンピックにて
銀メダル1個、銅メダル1個を獲得
パラリンピック競技における
日本人メダル獲得数最多となる
2008 リーマンショックが起こる

2009 河合純一氏、東京アジアユース
パラゲームス、日本水泳チーム監督を務める

2011 東日本大震災が発生

2012 平成24
ロンドンパラリンピック開催
2012 河合純一氏、ロンドンパラリンピックにて
2種目入賞（4位、6位）

2013 平成25
日本障がい者水泳協会設立

2014 平成26
日本障がい者水泳協会、日本水泳連盟に加盟

2015 河合純一氏、日本水泳連盟理事に就任

オリンピック・パラリンピック年表

	オリンピック	パラリンピック
1896	第1回 アテネ[ギリシャ]	
1900	第2回 パリ[フランス]	
1904	第3回 セントルイス[アメリカ]	
1908	第4回 ロンドン[イギリス]	
1912	第5回 ストックホルム[スウェーデン]	
1916	第6回 ベルリン[ドイツ]＊中止	
1920	第7回 アントワープ[ベルギー]	
1924	第8回 パリ[フランス]／第1回 シャモニー・モンブラン[フランス]	
1928	第9回 アムステルダム[オランダ]／第2回 サン・モリッツ[スイス]	
1932	第10回 ロサンゼルス[アメリカ]／第3回 レークプラシッド[アメリカ]	
1936	第11回 ベルリン[ドイツ]／第4回 ガルミッシュ・パルテンキルヘン[ドイツ]	
1940	第12回 東京[日本] ＊返上 → ヘルシンキ[フィンランド] ＊中止	
1944	第13回 ロンドン[イギリス] ＊中止	
1948	第14回 ロンドン[イギリス]／第5回 サン・モリッツ[スイス]	
1952	第15回 ヘルシンキ[フィンランド]／第6回 オスロ[ノルウェー]	
1956	第16回 メルボルン[オーストラリア]／ストックホルム[スウェーデン] 第7回 コルチナ・ダンペッツオ[イタリア]	
1960	第17回 ローマ[イタリア] 第8回 スコーバレー[アメリカ]	第1回 ローマ[イタリア]
1964	第18回 東京[日本] 第9回 インスブルック[オーストリア]	第2回 東京[日本]
1968	第19回 メキシコシティー[メキシコ] 第10回 グルノーブル[フランス]	第3回 テルアビブ[イスラエル]
1972	第20回 ミュンヘン[西ドイツ] 第11回 札幌[日本]	第4回 ハイデルベルグ[西ドイツ]
1976	第21回 モントリオール[カナダ] 第12回 インスブルック[オーストリア]	第5回 トロント[カナダ] 第1回 エンシェルツヴィーク[スウェーデン]
1980	第22回 モスクワ[ソ連] 第13回 レークプラシッド[アメリカ]	第6回 アーネム(アルヘルム)[オランダ] 第2回 ヤイロ[ノルウェー]
1984	第23回 ロサンゼルス[アメリカ] 第14回 サラエボ[ユーゴスラビア]	第7回 ニューヨーク[アメリカ] アイレスベリー[イギリス] 第3回 インスブルック[オーストリア]
1988	第24回 ソウル[韓国] 第15回 カルガリー[カナダ]	第8回 ソウル[韓国] 第4回 インスブルック[オーストリア]
1992	第25回 バルセロナ[スペイン] 第16回 アルベールビル[フランス]	第9回 バルセロナ[スペイン] 第5回 ティーニュ/アルベールビル[フランス]
1994	第17回 リレハンメル[ノルウェー]	第6回 リレハンメル[ノルウェー]
1996	第26回 アトランタ[アメリカ]	第10回 アトランタ[アメリカ]
1998	第18回 長野[日本]	第7回 長野[日本]
2000	第27回 シドニー[オーストラリア]	第11回 シドニー[オーストラリア]
2002	第19回 ソルトレークシティ[アメリカ]	第8回 ソルトレークシティ[アメリカ]
2004	第28回 アテネ[ギリシャ]	第12回 アテネ[ギリシャ]
2006	第20回 トリノ[イタリア]	第9回 トリノ[イタリア]
2008	第29回 北京[中国]	第13回 北京[中国]
2010	第21回 バンクーバー[カナダ]	第10回 バンクーバー[カナダ]
2012	第30回 ロンドン[イギリス]	第14回 ロンドン[イギリス]
2014	第22回 ソチ[ロシア]	第11回 ソチ[ロシア]
2016	第31回 リオデジャネイロ[ブラジル]	第15回 リオデジャネイロ[ブラジル]
2018	第23回 平昌[韓国]	第12回 平昌[韓国]
2020	第32回 東京[日本]	第16回 東京[日本]

夏季大会
冬季大会
河合純一氏出場大会

パラリンピック・障害者スポーツに関する主なできごと

1888 ドイツで聴覚障害者のためのスポーツクラブが創設

1910 ドイツ聴覚障害者スポーツ協会が創設

1924 国際ろう者スポーツ連盟CISSが設立
第1回国際ろう者スポーツ競技大会開催

1948 ストーク・マンデビル病院内で車いす患者によるアーチェリー大会を開催。これがパラリンピックの原点となる

1952 第1回国際ストーク・マンデビル大会開催

1960 国際ストーク・マンデビル大会委員会ISMGC設立
第1回パラリンピックと位置づけられる国際ストーク・マンデビル大会開催

1976 国際身体障害者スポーツ大会が、初めて国際ストーク・マンデビル競技連盟ISMGFと国際身体障がい者スポーツ機構ISODの共催で行われる

1980 視覚障害者の国際的なスポーツ団体である国際視覚障害者スポーツ協会IBSAが設立

1985 国際オリンピック委員会IOCは国際調整委員会ICCがオリンピック年に開催する、国際身体障害者スポーツ大会を「Paralympicsパラリンピックス」と名乗ることに同意する

1986 国際聴覚障害者スポーツ協会と、国際精神薄弱者スポーツ協会がICCに加盟

1989 国際パラリンピック委員会創設

1999 日本パラリンピック委員会創設

スポーツ歴史の検証
Sport History

小学生のころ、水泳部にて（左から4人目）

プールサイドでメダルを下げて

盲学校にて、化学実験

中学1年生のころ、同級生と（右から2人目）

1992年　バルセロナパラリンピックでメダルを獲得（左）

中学校での授業風景

1996年　アトランタパラリンピックにて金メダルを獲得し、手を上げて声援に応える

1996年　アトランタパラリンピックでの力泳

2015年8月　この年から制定された「水泳の日」に水連理事として参加

2004年　アテネパラリンピックで金メダルを獲得

2008年 北京パラリンピック

2004年　アテネパラリンピックでの力泳

2008年 北京パラリンピックでメダルを獲得

河合純一

2000年　シドニーパラリンピックの閉会式にて（後列右から2人目）

2012年　ロンドンパラリンピック

2020年東京オリンピック・パラリンピック招致活動

2009年　国際オリンピック委員会（IOC）総会で
プレゼンターを務める

パラリンピアンズ協会会長として講演
写真:日本パラリンピアンズ協会